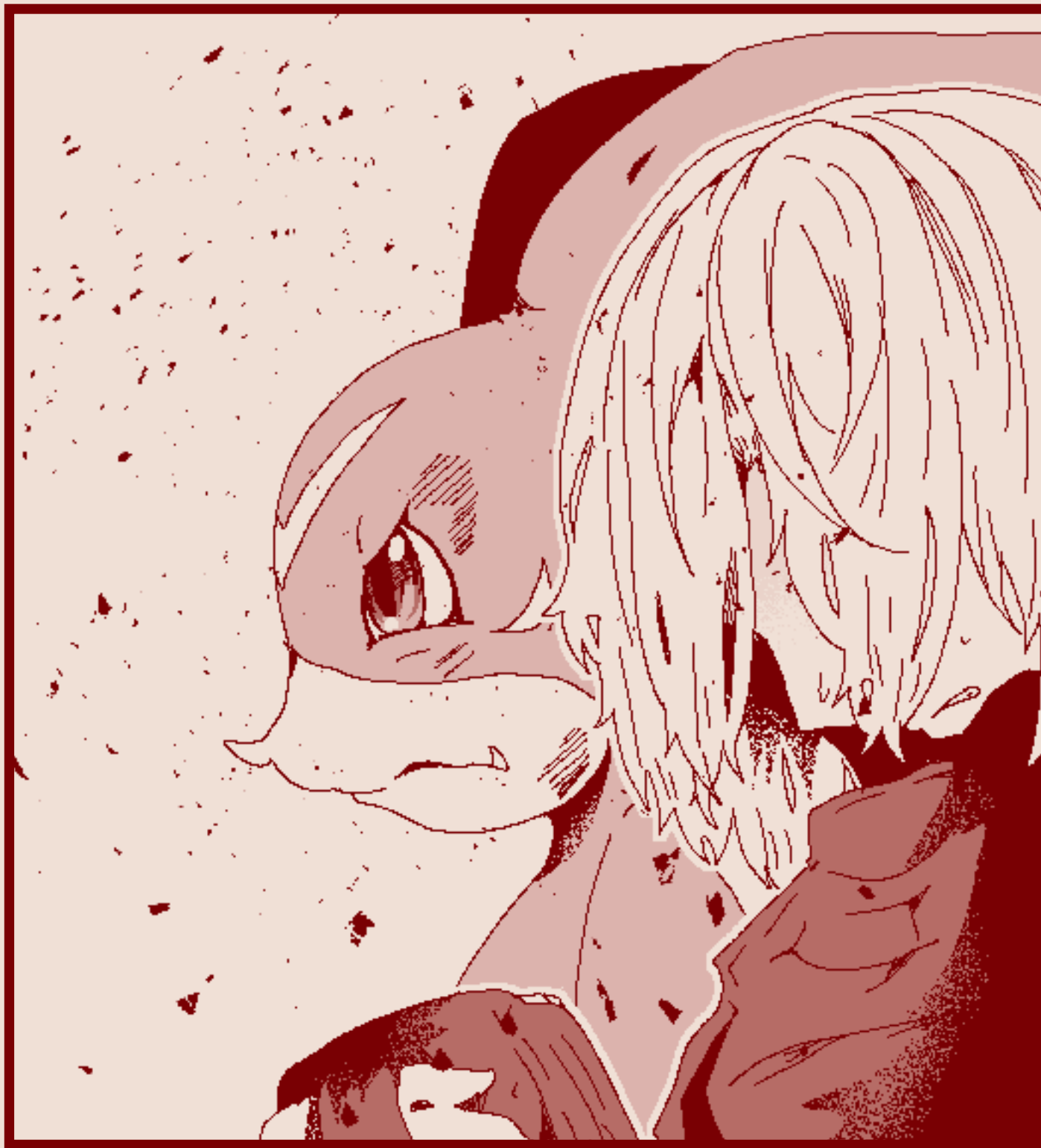




勇太が去った後、叶は託されたゴーグルを見ながら項垂れていた。

「勇太にヴォーボモンいい奴だったね叶。」

ブイモンが叶の横に立つ。

「俺はあの2人に死んで欲しくない…だから行くよ。」

「…助けにか？死ぬだけだぞ。」

「…かもしれない…正直、怖いよ。」

でもあの2人の行く時に見せた光…それに、行動を思い出すとここが熱くなるんだ。」

ブイモンが胸を抑える。

「きっと…これが勇気なんだ。」

…叶はこのままでいいの？」

「…っ。」

叶は唇を強く噛み締めた。



轟音と硝煙、熱せられた煙は滞留する火と言っても過言ではない。
その中から迷いなくケルビモン達は飛び出す。
ひとりベルスターモンが先行し飛び出していく。

「あの！お馬鹿チン！またひとりで!!!」

ベルスターモンが飛び出したのは決して連携を取るための先行ではなく、自身が一番にデーモンと戦うためである。

それに併せてサンドリモンを速度を上げて追いついて行く。



サンドリモンはベルスターモンを盾にし、デーモンの視界から消える。
ベルスターモンが銃での牽制の後に、肉弾戦へ入る。
超究極体へ進化したデーモンとともに肉弾戦が可能なのはベルスターモンとケルビモンのふたりであった。
しかし、ベルスターモンは数回の応酬は可能だが、それ以降はデーモンに押されてしまう。
それは、これまでの数回の応酬で明確に格付けされていた。
今回も数回の応酬の後、ベルスターモンは吹き飛ばされた。
それに入れ替わるように、サンドリモンが蹴りを繰り出すが、デーモンに読まれておりカウンターで吹き飛ばされる。
更にそれに併せて、ベルスターモンが体勢を直し、踵から銃弾を乱れ撃つ。
しかし、デーモンが口から吹いた炎で弾き飛ばす。
ベルスターモンは目線だけ横に逸らす。
飛び散った弾丸が地面の煙を上らせる。



煙が上るに合せてカラテンモンがデーモンに素早く近寄り刀を振り上げるが、デーモンが起こりの瞬間を片足で止める。

「甘いわ、煙の動きで容易に読めるぞ!」

「なっ!」(馬鹿な微かにしか煙は動いていなかったはず…!?)

「貴様ではないカラス。

後ろの貴様だ!!!」

「!?!」

後方からカラテンモンに気を取られた隙を伺い、飛び出してきたライジルモンをデーモンは見ていた。

そのまま火球を放ち、ライジルモンを吹き飛ばす。

次いで、押せていたカラテンモンの刀を叩き折り、蹴りを入れ吹き飛ばす。



「デーモン!!!」

「ケルビモン!!!」

遅れて出たケルビモンがデーモンの顔面に拳を叩き込む。

デーモンは、それを顔面で受けケルビモンの動きを止め、カウンターで顔面を殴り飛ばす。

「待ちわびたぞ!!!あの日から!!!貴様のその顔を碎いてやりたかったぞ!!!」

「私に怒りをぶつきたいのなら私だけにしろ!この世界を巻き込むな!!」

「貴様だけ!?笑止!ワシがこの業火をぶつきたいのは全てにだ!

貴様や天使共!全てのデジモンに人間共!ワシらを否定した全てとどちらが消し炭になるか!お互いに業火に焼き合ってな!!!」

「馬鹿者が!!!」

「貴様が言うか!!!ケルビム!!!」

お互いの拳が再び顔面を殴り抜け両者の体勢が崩れる。



その隙を突き、ベルスターモンがデーモンの腹部に蹴りを叩き込む。

「がっ!？」

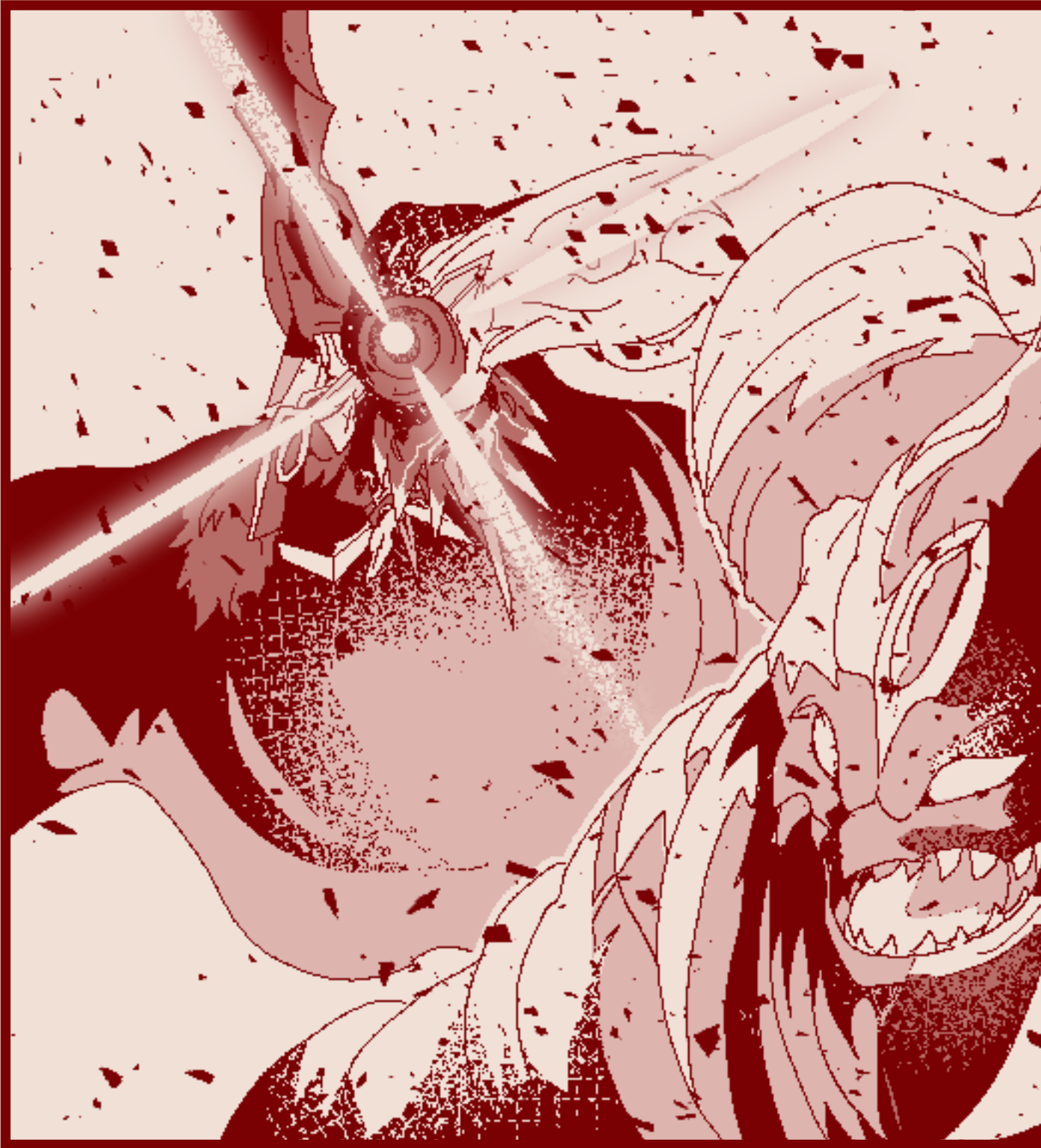
「まだまだ!!!」

ベルスターモンの踵から乱発射された銃弾がデーモンの腹部にめり込んでいく。

(それでも貫けねえのか!この化物が!!)

「今だ!!!クソガキ共!!!」

「!？」



ベルスターモンを吹き飛ばすと今までにない速さで何者かが迫ったのをデーモンは感じた。
「オメガモ…!!!??いや!!!」

「一気に攻めるんだ!!!これで全部叩き込め!!!」
慎平が大声で叫ぶ。

「ライジルモン X3…!!!!」

ライジルモンを中心として、チンロンモン、カラテンモンがデジクロスし、デーモンに銃口を向ける。
「チッ!!!」

発射された砲弾が直撃し、デーモンが回避しようとする足元が瞬間凍り一瞬動きが止まる。

「!また貴様か魔術師の女!!!」

ヘクセブラウモンの氷でデーモンの足元が凍結していた。

ライジルモン X3 の砲撃を更に浴び今までで一番のダメージがデーモンを襲った。
「ぬあああああああ!!!!」

デーモンが氷を碎き、ライジルモン X3 に向き直るが、この一瞬で瞬時に距離を詰められ斬りつけられる。

「終わりだああああああ!!…!!!!」

カラテンモンの刀を突き立てようとした瞬間、ライジルモン達のデジクロスが解ける。
(リバウンド…!超究極体レベルに並び立とうとするのはやっぱり負担が…!!)

デーモンが空かさず火球をぶつけようとするのをチンロンモンが盾となり吹き飛ばされたもののライジルモンとカラテンモンへのダメージは最小減に済んだ。



「くっ!!」

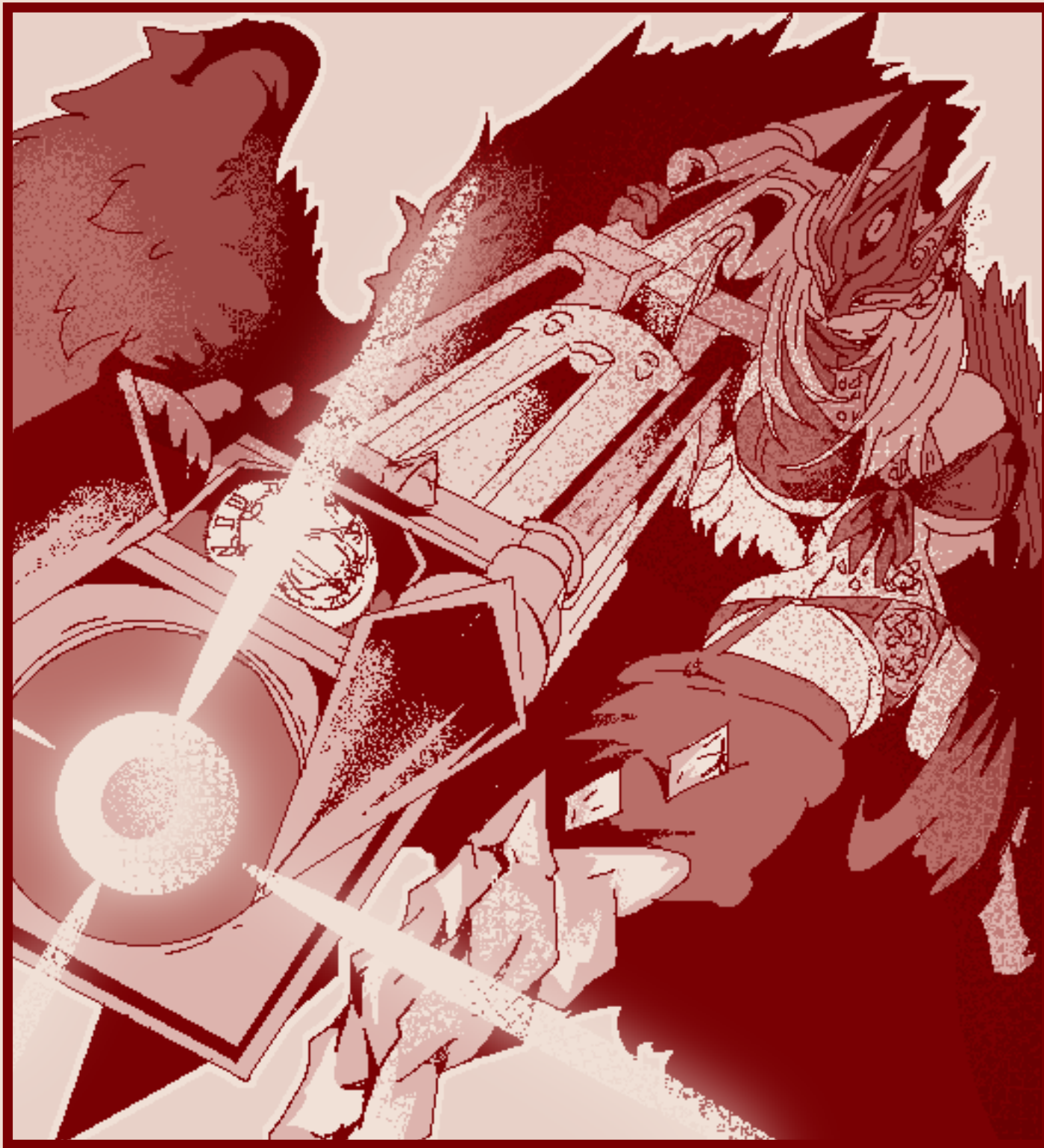
「何度も!!!何度も!!!これまでだ!!!!!!!!!!!!」

ヘクセブラウモンが氷の壁を作ろうとしたが、それよりも速くデーモンが頭部を掴みそのまま地面へ叩きつける。

「が!!???」

一気にブルコモンまで退化してしまう。

そこに追い打ちを掛けようとした瞬間。



「ベルスターモン X2」「サンドリモン X2」

ベルスターモンとサンドリモンのデジクロスした姿が、大型の砲台をデーモンに向けて掃射する。

「ぬー!!!??貴様ら!!!!」

掃射の雨の中ダメージを覚悟し、デーモンが向かってくる。

「てめえ!こっちに合わせやがれ!!」「あなたこそ私にお合わせなさい!!!そもそもなんであなたがお中心のデジクロスみたいに言ってますの!!」「こっちの台詞だ!!てめえを組み込んでやったんだから大人しく主導権こっちに譲れ!!!婚活女!!!」

「「!!!」」

デーモンが殴り掛かろうとした瞬間、それまでバラバラだった動きが瞬時に統一されベルスターモン、サンドリモン両者に今までない速度でデーモンの攻撃を躲し腹部に砲撃を叩き込む。

「チッ!邪魔するなよ!」「こっちのおセリフですわ!!!行きましたわよ!!!」

(こいつらは、毎度口と比べて連携が取れていて厄介だな!!!)



地面に叩き着けられたデーモンへ雷の速さでデジモンが迫って来る。

「ゼクスグレイモン X2 !!!!!」

ゼクスグレイモンとチンロンモンがデジクロスした姿が渾身の力を籠めた電撃の拳をデーモンの顔面に叩き込む。

「!!!!!!」

遂にデーモンが膝を着く。

そこへ更にサンドリモン達と、ケルビモン達も駆けつけ攻撃を仕掛けようとする。
(やっぱり利いた! デジクロスなしでもゼクスグレイモンとチンロンモンの攻撃は通っていた!)

畳みかければ…勝てる!!!)

「くっく…」

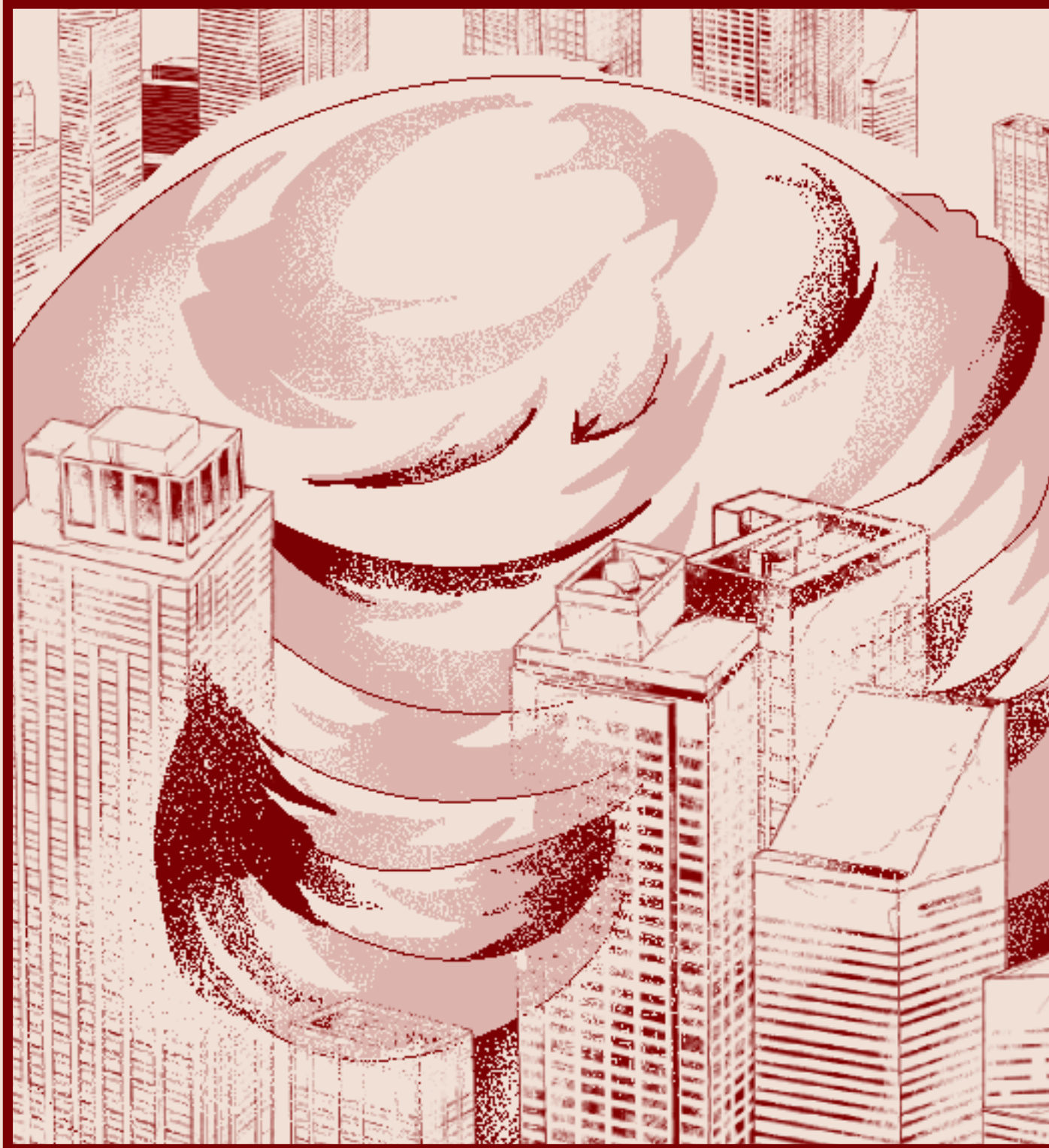
「!?」(笑ってる…!?)

デーモンが笑みを浮かべそして高らかに叫ぶ。

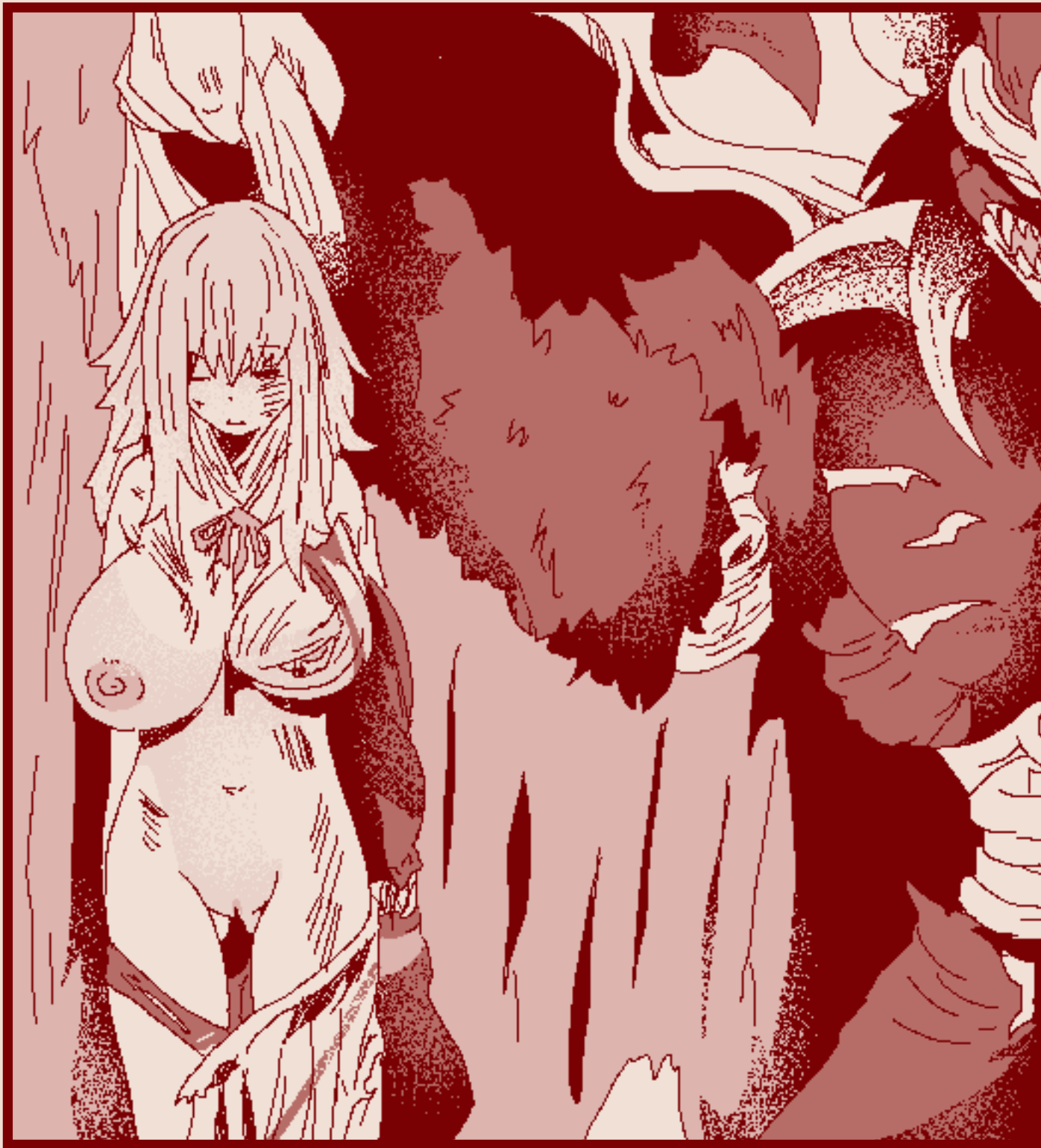
「よくぞここまでワシを追い詰めた!!!!!! 褒美だ!!!!!! どちらが死ぬかのゲームと行こうじゃないか。」

「不味い!!!!!!」

「アルゴolzフレイム。」



デーモンが自身の真下に向け巨大な爆発を引き起こした。
デーモンは、自身事、止めを刺そうとして来たケルビモン達を爆発に巻き込んだ。



「ぐっ…みんな…!?」

全員生き延びたものの爆発の衝撃で動けないダメージを負っていた。
「デーモンは…!?」

「死ぬところであったぞ貴様ら。」

自身の身体を修復しつつ、雪奈をぶら下げ爆炎の中からデーモンは現れた。
「雪奈!!!!」

颯乃の呼び掛けにも雪奈はわずかにしか反応しなかった。
爆発の衝撃で意識が朦朧としているようであった。

「惜しかったな、あと一瞬でも早く誰かが一撃を入れれば貴様らの勝ちだったが、
しかし…ワシの修復はもう終わる。

まずは、散々手こずらせたこの魔術師の女からだ。
その後、ひとりずつ殺してやろう。」

「!!…やめろ!!!雪奈!!!雪奈!!!」

「馬鹿!!そんな身体で!!!」

「離せ!!!クロウ!!!雪奈!!!せ…!」

デーモンの爪が雪奈の首に掛かる瞬間。

一陣の風と共にデーモンの右手が斬り飛んだ。
「!」





掴まれていた雪奈は引き剥がされ、颯乃達の近くで降ろされた。
大きな影が小さくなっていく。

「勇太…君。」

「すみません…遅くなりました。」

あの…これ。」

そう言うと勇太はジャケットを雪奈に掛ける。

「!…それよりその腕!!!」

「雪奈!」

雪奈に抱きつく颯乃に言葉が遮られる。

勇太はそれを見送りゆっくりとデーモンの方へ向かって行く。

「大丈夫です。」

後は任せて…。」

「日野 勇太…!

貴様がここにいるという事は叶は…!」

「デーモン…俺達が相手だ。」

お前が俺達から奪ったものの借り…ここで返させてもらう。」

「貴様ら2人でか?

その姿でよく言えたものだな…!」

「…。」

勇太は息を飲む、自身のボロボロの身体に加え、以前対峙した時以上の威圧感に無意識に手が震えていた。



「いや…4人だ。」

「…!」

そこには、叶とブイモンがいた。

「貴様ら…。」

「悪いなデーモン、殴られて目が覚めたんだ。」

流石に、身内殺させようとするブラック企業の社長に付き合うのはもうこりごりだつてな。」

「…それで貴様の欲した自由が手に入ると?」

「…ああ、大事な親友の隣ならな。」

「叶…。」

「…悪かった勇太。」

「ばか…そこはありがとうだろ。」

「…そうだな。」

それとこれ返すぜ。」

叶が勇太にゴーグルを渡す。

「いいの?」

「ああ…そんなもんなくても、お前が居れば戦えるさ。」

それに…それを渡してやらないといけないのはお姫様の方だろ。」

「光がお姫様って感じじゃないと思うけどね。」

ブイモンはいいの?」

「うん。」

俺達も君達の姿を見て…ヴォーボモン。」

勇太がゴーグルを掛ける。

「行くぜ、勇太。」

今回は俺達4人でヒーローだ!!」

「ああ!!!」

気付けば勇太の震えは止まっていた。

今あるのは、闘志のみであった。

そして小さく唇を動かす程の大きさに声を漏らした。

(おかえり…ヒーロー。)

そのやり取りを見てデーモンは高らかに叫んだ。

「がはははは!!!!ならば見せてみろ!!!選ばれし子供達!!!これが最終局面だ!!!!!!」

その叫びと共に、4人と1匹の獣はお互いに向かい駆けた。

最後の戦いの火蓋が落ちた。